記載や記述に伴う誤りがある場合があります。
一、研究史の概要とその問題点

《七大寺年表》と《僧導補任抄出》（東大寺東南院経蔵本十二巻より抄出したもの）については、前掲抄稿『興福寺本抄出』（群書類従巻五四四所収、大日本仏教全書第二二一巻）に記載されており、その抄録点を整理してまいりました。この抄録は極めて簡単で今日まで確実にされた点を記すに留めたい。本稿では、右の掲稿に基づいて、大仏観音真福寺生宝院所蔵『七大寺年表』と『僧導補任抄出』（四八巻三頁）の項において、その研究史

また、『諸書に引かれた僧導補任抄出』については、『高野春秋編年輯』第二巻に掲載されている僧導補任抄出が存在する。
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

本の撰者として記されている「忠珍僧都」は、「忠珍僧都」の誤りに基づくものと思われる。さらに、「七大寺年表」所収『僧綱補任』の残欠本であることを初めて明確にされた。

その後平田俊春氏は、「七大寺年表の史料批判」所収『僧綱補任』の抄出原本である東大寺東南院経蔵本十二巻の『僧綱補任』の残欠本であることを初めて明確にされた。

鈴木博士著『日本仏教全書』所収の『僧綱補任』においても、「七大寺年表」として抄出された『僧綱補任』については、同氏著『日本仏教史の批判的研究』においても抄出された『僧綱補任』についての解題を執筆された堀池春峰氏は、従来の研究で明確になった諸項を略述した上で、「七大寺年表」として抄出された『僧綱補任』と同様に抄出された『僧綱補任』を指摘された。

平林盛得氏と小池一行氏の共編『僧綱補任引僧歴縦覧』所収「七大寺年表」には、「七大寺年表」を参照。東大寺東南院経蔵本十二巻本『僧綱補任』は、『七大寺年表』にみられる「永元元年十一月〜毎年後の仁安三年二月〜永元三十四年十一月』を指摘されている。それらは、「七大寺年表」所収『僧綱補任』の残欠本であることを初めて明確にされた。

本の撰者として記されている「忠珍僧都」は、「忠珍僧都」の誤りに基づくものと思われる。さらに、「七大寺年表」所収『僧綱補任』の残欠本であることを初めて明確にされた。

鈴木博士著『日本仏教全書』所収の『僧綱補任』においても、「七大寺年表」として抄出された『僧綱補任』については、同氏著『日本仏教史の批判的研究』においても抄出された『僧綱補任』についての解題を執筆された堀池春峰氏は、従来の研究で明確になった諸項を略述した上で、「七大寺年表」として抄出された『僧綱補任』と同様に抄出された『僧綱補任』を指摘された。

平林盛得氏と小池一行氏の共編『僧綱補任引僧歴縦覧』所収「七大寺年表」には、「七大寺年表」を参照。東大寺東南院経蔵本十二巻本『僧綱補任』は、『七大寺年表』にみられる「永元元年十一月〜毎年後の仁安三年二月〜永元三十四年十一月』を指摘されている。それらは、「七大寺年表」所収『僧綱補任』の残欠本であることを初めて明確にされた。

東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

その後平田俊春氏は、「七大寺年表の史料批判」所収『僧綱補任』の抄出原本である東大寺東南院経蔵本十二巻の『僧綱補任』の残欠本であることを初めて明確にされた。

鈴木博士著『日本仏教全書』所収の『僧綱補任』においても、「七大寺年表」として抄出された『僧綱補任』については、同氏著『日本仏教史の批判的研究』においても抄出された『僧綱補任』についての解題を執筆された堀池春峰氏は、従来の研究で明確になった諸項を略述した上で、「七大寺年表」として抄出された『僧綱補任』と同様に抄出された『僧綱補任』を指摘された。

平林盛得氏と小池一行氏の共編『僧綱補任引僧歴縦覧』所収「七大寺年表」には、「七大寺年表」を参照。東大寺東南院経蔵本十二巻本『僧綱補任』は、『七大寺年表』にみられる「永元元年十一月〜毎年後の仁安三年二月〜永元三十四年十一月』を指摘されている。それらは、「七大寺年表」所収『僧綱補任』の残欠本であることを初めて明確にされた。
<table>
<thead>
<tr>
<th>&quot;甲斐寺縄張地図&quot;</th>
<th>&quot;甲斐寺縄張地図&quot;</th>
<th>&quot;甲斐寺縄張地図&quot;</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>『甲斐寺縄張地図』</td>
<td>『甲斐寺縄張地図』</td>
<td>『甲斐寺縄張地図』</td>
</tr>
</tbody>
</table>

 Bieberstein は、甲斐の大略、特に長野地方を対象にした地図『甲斐寺縄張地図』を詳細に記載しています。
右のとおり、東大寺東南院経蔵本『僧綱補任抄』和銅三年庚戌条は、僧綱の補任記事のみならず、追加されている記事についても、興福寺本『僧綱補任』同条を基盤（印部分）として、興福寺建立記事などは、さらに『扶桑略記』和銅三年条（印部分）と、僧綱史大系第十二巻七八頁）によって書き加えたものであることが明らかであり、『僧綱補任抄』こととあり、同書下の本巻に、承応二年三月五日、僧綱補任抄略二巻、以降融通寺本所蔵経蔵本を参照せんとある。
語を引用すると、和銅四年三月の条より和銅五年三月の条に至るまで、律師の項に弁通の名を列ねさせ、和銅五年壬子条に、

と記されている。

つまり東大寺東南院経蔵本は、興福寺本の和銅五年壬子条の少僧都弁通に付された注記をもとに、「或本」（東大寺

東南院経蔵本の和銅五年壬子条所引）によって、弁通の律師補任年月日を知り、大宝三年壬寅（七〇〇）正月二十二日

という。「統日本紀」大宝三年正月癸巳（二十五日）条は、

とあるように、同月少僧都に補任された智源は、大宝三年（七〇〇）正月二十五日に、僧正に転じているのであるが、
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

弁昭について、興福寺本『僧綱補任』大宝三年壬寅条の一部に欠損がみられるため、同年に少僧都に補任された僧正施、唐学生、小豆氏、大僧都道昭、三月十八日任、大僧都道昭、十一月十五日任、薬師寺編智僧、三月十八日任、僧正施、三月十八日任、

東大寺東南院経蔵本『僧綱補任』文武天皇即位第二年戌戌条には、弁昭は大宝三年癸卯条には、聞違えなく少僧都の任にあったことが記されている。ところが、弁昭のことをしており、弁昭が律師に補任されたのは、大宝三年壬寅（七〇〇〇）ではなく、文武天皇即位第二年戌戌（文武二年）十二月日のことであるとしている。

『続日本紀』には、前記の文武天皇即位第二年三月壬午（二二二〇）条以外、同年の僧綱補任記事は見られず、弁昭は大宝三年正月、律師を経ることなく少僧都に直
任されたと『成本』が告げていることを注記し、大宝二年壬寅条にも、

少僧都弁昭正月十五日任。

と、同様の注記を施しており、両条に記された『成本』とは、恐らく興福寺本を指しているものと思われ、東大寺東

南院経蔵本は、この『成本』が告げせる弁昭の大宝二年少僧都直任という点を検討し、他本によって、文武天皇即位第

二年戊戌二月日に、弁昭は律師に補任されたということを書き入れたものと思われる。

良敏については、興福寺本『僧綱補任』、天平九年丁丑条に、

大僧都良敏、月日任。義鸞僧正弟子。

とあり、良敏が律師・少僧都を経ることなく、天平九年丁丑（七三七）大僧都に補任されたことを告げているものの、

ここにも『〇〇〇勅』と、弁通の場合は同様、疑問符が付されており、東大寺東南院経蔵本『僧綱補任』はこれを検

討し、その神亀元年甲子条に、

律師良敏、寺義鸞弟子。成本無之。

と記している。この『成本』とは、興福寺本を指しているものと思われる。

東大寺東南院経蔵本は、良敏は天平九年丁丑（七三七）に大僧都に直任されたのではなく、律師に補任された。

天平十年戊寅（七三八）入滅を迎えたと記されている。

丹青に『続日本紀』には、天平九年八月丁丑（三十六日）条に、

以玄昉法師を三僧正。良敏法師為大僧都。
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

と記されており、天平九年丁丑（七三七）八月二十六日に、大僧都に補任されたこととは確認されるものの、少僧都を経ての補任か否かは、先にも触れられた通り、この記載方法からは導き出すことはできない。

栄弁及び行遠については、興福寺本『僧綱補任』天平十年戊寅条に、小僧都行遠師、七月三日任小僧、七月三日乙巳任小僧、七月三日登任小僧、七月三日不登任小僧、七月三日不登任小僧を挙げているが、これは、この栄弁の記事は、同本の天平十年戊寅条以前に、栄弁が律師に補任されていることを示さないにもかかわらず、この栄弁の名を掲げるなど、随所に問題を孕んでいるように出される。

東大寺東南院経蔵本の撰者は、この興福寺本の矛盾した記事に気付き、これを検討し、その栄弁三丁三丙寅条に、と記し、翌神亀三年丙寅条には、貴師栄弁、不見、行遠、師寺、行基弟子、行遠、師寺、不登任の如く記されている。すなわち栄弁と行遠は、共に神亀三年乙丑（七三五）に律師に補任されたとしているものの、その拝所となっている史料は、補任年月日さえ満足に記載しているものではなくなかったのである。翌神亀三年丙寅条には、と記し、栄弁及び行遠については、興福寺本を指し
ているものと思われる。

興福寺編の記載事項の矛盾を具に検討した東大寺東南院院総本ではあるものの、栄弁の少僧都補任と、行達の僧都補任の両方の記載を踏襲しているものである。

ことから、興福寺編の記載を踏襲しているのである。

『続日本紀』の天平十年関七月乙巳（九日）条には、

『続日本紀』の天平十一年十月丙子（十七日）条に、

少僧都行達為三僧都とあることによって知られる。

これに沿っても栄弁も共に天平十年戊寅七月九日に少僧都に直任されたように、

『続日本紀』の僧都補任記載の記載方法は曖昧であるため、断定することは不可能である。

⑧良弁については、興福寺編『僧範補任』の天平勝宝三年辛卯条に、
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

小僧都良弁

この記事には、「○○○様」という疑問が付されているわけではないが、同年以前の条文に、律師に補任されるべきことを示していると考えることが出来るよう、

東大寺東南院経蔵本も右のように考え、検討を加え、他本に拠って、良弁の律師補任については、天平勝宝三年辛卯（七五五）良弁は律師を経ることなく、少僧都に直任される

という文書が引用されているとおりである。そして、良弁の少僧都補任については、天平勝宝三年辛卯のこととしているのである。

天風院三年辛卯のことであり、少僧都の律師を経たのか、少僧都、僧正の補任年はそれぞれ記されてはいるものの、律師の補任については、その記載が見られず、少僧都直任というのが事実ではないかと思わせるのである。

小僧都慈訓

不過を破る。
あるようやに、興福寺経本は、天平勝宝八年丙申（七五三）五月二十日に、慈訓は少僧都に直任されたということを記し、良弁と同様、天平十年乙酉（七八五）正月二十一日に律師に補任されたことを記載しているのである。

『続日本紀』天平勝宝八年五月丁丑（三十四日）条には、

「信行は、天平勝宝八年五月二十日、少僧都兼法務に転じたことを記述する。」

とあり、築路と小僧都良弁とは大僧都、華厳講師慈訓は少僧都にそれぞれ補任されていることが知られる。また前の鑑真慈訓、法進・慶俊並に律師

なお慈訓は、天平勝宝七年（七六三）九月四日に僧職を追われ、代わって道鏡が少僧都の任に就いており、

その後の天平勝宝八年甲辰六年、復任の三年前の神護

景雲元年丁未までの間、前少僧都慈訓と、各条の最終年付加しており、興福寺経本に見られる東大寺律師南院経蔵

本の一つの特徴ともなっている。

慶俊については、興福寺経本「僧綱補任」天平神護三年丙午条に、
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

と記され、同本には、翌神護雲元年丁未条より同三年己酉条に至る三箇年間、その名が見えないものの、同本宝龟元年庚戌条には、律師慶俊の名を列記させ、興福寺にあった『去職記』という注記は加えず、翌神護慶雲元年丁未条以下にも律師として慶俊の名を記しているのである。

さらに、興福寺本が宝亀元年庚戌（七〇〇）八月二十六日に慶俊は少僧都に補任されたとして掲げている点も、東大寺東南院経蔵本は検討を加え、宝亀二年辛亥の年より少僧都の任にあったとしている。

しかしながら、『続日本紀』宝亀元年八月乙丑（七月）条に、以迄慈訓法師、慶俊法師復為少僧都と記されているように、道鏡追放後、慈訓と慶俊は再び僧綱に補任され復帰しており、興福寺本の記載は正しく、慶俊が道鏡とともに僧綱にあったとしている東大寺東南院本は、全く事実に反した記述を行っているのである。

以上のことより、東大寺東南院経蔵本『僧綱補任』は、興福寺本『僧綱補任』の中に『〇〇〇賛』と、疑問が付されており、この本を書き改めた東大寺東南院経蔵の記事の信憑性は、『続日本紀』の僧綱補任記事に漏れがないという確認がなされなかった。
こと、またその僧綱補任記事の記載方法も統一性に欠け、基準を見出すことが出来ないこともあり、論及し得るだけの根拠は得られないものの、①慈訓②慶俊の場合の理由によると、僧院補任の可能性が高いものがあるから反面、③慶俊④慶俊の場合は東大寺・東南院経蔵本の明らかな誤記という事実もあり、そう高いものがあるとはいえまい。それは、東大寺東南院経蔵本においては、⑤弘耀・安寛・標瓊・尊栄

と、新たに僧綱に補任された僧侶が列記されているものの、その補任日月が記載されていない僧侶について、その任日を他本によって補完している場合がある。以下この点について、幾人かの例を通じて見てみよう。

弘耀については、東大寺東南院経蔵本『僧綱補任』宝亀元年庚戌条に、

律師弘耀

寺成本無之

弘耀

寺成本無之

七月任。薬師

と記し、興福寺本が告げる宝亀元年庚戌（七〇）ではなく、天平神護三年丙午（七六）七月、律師に補任されたと
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧経補任』の性質について

している。

安訳、標経。善栄が三三人について、東大寺東南院経蔵本『僧経補任』神護景雲元年丁未条に、

ある。その項目は、東大寺東南院経蔵が拝った本にも記されていたかったものの、興福寺本が告げる宝亀元年庚戌

（七年）補任録を採らず、他本によって神護景雲元年丁未（七年）の補任であるとしている。

『統日本紀』には、善栄の補任事は見えるものの、安覧、標経のそれは記載がない。

興福寺本『僧経補任』延暦四年乙丑条に、

善上、玄僧

と、新たに僧経に補任された僧侶が挿げられているものの、前述の場合と同様、その補任条目は記載されていない。

東大寺東南院経蔵本『僧経補任』延暦三年甲子条には、

律師善上、玄僧

同上
あり、善上と玄慵は共に、延暦三年甲子（八四六）六月九日、律師に補任されたことを記している。

善上と玄慵について、『続日本紀』延暦三年六月戊申（九日）条に、

詔を仰ぎ、善上・玄慵の律師補任の条文を引用している。

以上のとおり、①として掲げた僧侶については、東大寺両院経蔵本は、善上と玄慵の律師補任の年月日を正確に記載していることの確認ができる。

補任年月日を見出し、善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に記載されている。

善上・玄慵を仰ぎ、善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。

以上のことを考慮に入れて、善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。

善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。

善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。

善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。

善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。

善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。

善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。

善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。

善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。

善上・玄慵の律師補任の記載が、東大寺両院経蔵本に正確に記載されている。
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

この泰源について、東大寺東南院経蔵本は、神亀二年乙丑（七三五）より天平八年甲子（七三六）正月四日の入滅に至るまで、律師の任にあったことを記載しているのである。なぜならば、泰演の僧綱補任記事は、用いた底本そのものを指していることを明らかにした。そこで、興福寺本『僧綱補任』に散見する『補任』のうちの幾つかを例として、東大寺東南院経蔵本がそれをどこにどのように受け止めかについて考えて見よう。

1. 小僧都、弁静。七月廿七日。東大寺別当。
2. 良興小僧都、東大寺別当。治五年。良興小僧都弟子。
3. 大僧都、良資。東大寺別当。治五年。良資僧都弟子。
4. 東大寺別当。但補任中不見。

東大寺東南院経蔵本「僧綱補任」の書写に際して用いた底本そのものを指していることを明らかにした。
大僧都 永覚
任東大寺別当。治五年。永興律師弟子。

① 延暦六年
○ 延暦六年条

○ 延暦十四年条

大僧都当大僧都 永覚。第二。治五年。良弁弟子也。
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧竅補任』の性質について

と記し、④の永興については、同本宝亀元年庚戌条は、

東大寺別当律師永興。治四年。良興僧都弟子。補任中不見。

と記し、⑤の僧義については、同本宝亀九年戊午条は、

東大寺別当少僧都僧義。治五年。良興弟子。補任中不見。

と記し、⑥の永覚については、同本延暦六年丁卯条は、

東大寺別当大僧都永覚。治五年。永興律師弟子。補任中不見。

と記し、⑦の僧義久君についても、同本延暦十四年乙亥条は、

東大寺別当僧義久君。治四年。後任三律師云々。但補任不見。良恵弟子。

と記しており、いずれも僧義の列に掲げることはせず、補任記事の外に付されているところに特徴がある。また、興

東大寺東南院経蔵本にみえる「補任」とは、興福寺本『僧竅補任』からの孫引きであり、現在の興福寺本を検討

の Bentley を東大寺東南院経蔵本は、その延暦十年甲申条に、「僧義本の他の例にならいないが、

東大寺別当少僧都僧源。治四年。
牛山住持は「寺院別当と交換解経措置」ということについて、他の僧侶たちと比べて遅く、延和十三年（八七〇年）十一月二十五日に公布された。これに解経措置が適用されたのは、他の個別寺院においても適用られており、それは翌延慶十三年（八七四年）三月二十三日に、延慶十四年（八七五年）正月二十五日に、延慶十五年（八七六年）正月二十二日に起こされた。当時の東大寺別当について、史料は充分に記録されていない。特に延慶十五年正月二十五日に行われたこの解経措置について、史料の記録はほとんどない。このため、この解経措置の詳細は不明である。

この解経措置は、東大寺において行われた僧侶の昇進制度についてのものである。特に延慶十五年正月二十五日に実施されたこの措置について、史料は全く記録されていない。このため、この措置の詳細は不明である。この措置は、東大寺において僧侶の昇進制度における僧侶の昇進を規制するものである。史料によれば、この措置は延慶十五年正月二十五日に実施されたが、その後の僧侶の昇進についての記録は全く見られない。このため、この措置の詳細は不明である。
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

三、東大寺東南院経蔵本『僧綱補任』の編纂時期

東大寺東南院経蔵本『僧綱補任』は、周知のとおり、大須観音・真福寺宝院所蔵『七大寺年表』上下二巻として伝存しており、その下巻に記された奥書は次のとおりである。

永万元年十月比書写了。 惠珍之。
この奥書より知られる桝合姿勢は、前節において、(1)から確かに分けで確認したところであり、作成した本そのものに対して、恵珍自身が必ずしも満足しておらず、より善本を求めて、さらに桝合する必要のあることを記していることをまず挙げておきた。

この奥書より知られる事実は多いが、前節までに述べた点との関係で言えば、基礎的材料として用いた興福寺本と僧範補任本と桝合した三本との相違が甚だしいということであり、作成した本そのものに対して、恵珍自身が必ずしも満足しておらず、より善本を求めて、さらに桝合する必要のあることを記していることをまず挙げておきた。

平田俊春氏は前掲「七大寺年表の批判」において、真福寺のその奥書は第二巻に付せられたものであり、補任抄出には「十一月」までの記事があるのは前後するようであるが、十一月にかえて編纂されたものである。
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

これに対して、平林盛得・小沢一行両氏編前掲『僧綱補任僧監総覧』所収『解題』（平林盛得氏執筆）は、

c. だたここで六条院を新院としていることに若干の疑念が残る。六条院は永元年六月に即位、三年後の仁安三

c. にて高倉天皇に位を譲られて新院となる。したがって永元年には六条天皇は新院とはよばれ得ない。だからこ

c. の場合は恵珍が永元年に十二巻本を編した内容そのままの抄出ではないことになる。このことはさらによりいくつか

c. の書き換えが深賢か。または恵珍が永元年に書写した十二巻本とは最低限が永元年ではなく、これより遡っ

c. た年次で、これに書き継ぎがあったか、などである。これらの論綱は早々に下せないので、ここではすでにのべ

c. ていてると十二巻本が恵珍の撰であることに疑念の余地があることを指摘するにとどめた。

とすれば、『新院院』は、永元年（一二五）六月二日に、東大寺東南院経蔵本『僧綱補任』十二巻より抄出したものであ

れ、その後仁安三年（一九八）二月十九日、位を憲仁親王（高倉天皇）に譲られた以降の六条天皇の称名であるから、

平林盛得氏の指摘のとおり、奇妙な記載である。

この『新院院』という記載は、『僧綱補任抄出』のそれまでの『○○天皇』という記載法からすれば、『今上』あるのは『六条天皇』とあるべきであり、前者であれば、六条天皇の御代に編纂されたものであることが確かな

後者であれば、六条天皇の御代に編纂されたもののということになるものの、現実には、『新院院』のみ
ここで思い起こすのは、水府明徳会『対権考文』『僧綱補任』嘉慶二年丁亥条に、
新院御即位、
嘉慶二年丁
とあり、同保安四年癸卯条に、
保安四年癸
とあることがある。

記載によれば、僧考館本『僧綱補任』乾德二年に成立時期を崇徳天皇の御代に求められた。記載より、僧考館本『僧綱補任』平安三条に『新院院六条』という意味で、すなわち六条院が、かつて六条天皇として即位された年ということがまるでいないだろうか。つま

推測するに、僧考館東大寺東南院経筵本『僧綱補任』十二卷は、第二巻の序書が示すように、永元元年（一二五

年（一二八）一月十九日以降に、その編纂を終了し、その最終巻である第二巻は、六条天皇が謹位され、新院とされた仁安三

に一か月に至る二巻の編纂を終えている。
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

あり、その基礎となった興福寺『僧綱補任』六巻をそのまま抄写したわけではないことは、前述のとおりであり、

その記載年代も、興福寺本を引き継ぎ、少なくとも永元年（一一六五）までに及ぶものであり、その完成をみるまで

に至った歳月は、二年を越えており、諸本の記事が一致をみないことは、あるいは基礎として用いた興福寺本の

関係記事を収集・検討したという事実よりすれば、二年という歳月はそれ程期間とも思えないのである。

なお、撰者恵珍については、『東南院文書第二』に記録がみえるとおり、第十一代の東南院主となった僧侶である。

田俊春氏が前掲『七大寺年表の批判』に記されている以上的事実を見出しには至っていない。

四、大須観音・真福寺宝生院と東大寺東南院経蔵本『僧綱補任』第一巻・第二巻

大須観音・真福寺宝生院が所蔵する典籍のうち、その主要なものには、『真福寺本目録疏解』（昭和二十九年五月）に

十八点、計十八点を紹介され、これら主要典籍の奥書より、開山能信によって編成されたことが判明する。

能信の後を経いた第十三世住職信瑜についても、その事蹟を記載した伝あるいは関係史料が残されていないのである。

＝大須観音真福寺略史＝（昭和二十九年五月）名古屋・浜島書房四巻、真福寺の盛況（昭和二十九年五月）によれば、

学は国密中通・通詔に通じ、徳も高く内外に聞かれる、東大寺東南院一品聖教親王（仏見大寺第二皇子と伝える）の師事し、

選ばれて唯一一人の付法を受け、名声は内外に宣伝され、弘治二年（一二五八）八月七月入寺したという。
信鶴の師事した聖珍について、恒明親王の子で、亀山院の孫にあたるという説。あるいは伏見天皇の子であるという説。いずれも正しそうであるが、いずれも正しそうではない。

聖珍は性質の後を継ぎ、第二十三代東大寺東院院主となり、建武元年（三三五）に、文和三年（三四三）に補任され、その後も康永二年（三四三）八月及び文和元年（三三五）九月に補任され、永安二年（三六二）閏正月十八日、入寂した。（東大寺別当

延文元年（三五四）九月二十八日には東寺長者に補され、延文五年（三五六）に、永安二年（三六二）四月には、院の書写した典籍より信鶴が転写したものを、真福寺寺本目録叢談に収録されている。

一交了。
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

貞治五年二月一日，中出門主，大王聖徳御筆本以他筆写之，自一交子。御本云。

貞治六年七月十八日以三南都東大寺東南院法親王御自筆御本謹写之矣。文和三年六月九日為三才学無用写之。写本雖為三写本成一帖字。東南院本交了。

宗書于時應安元年後六月十八日，申出，東大寺本院法親王御自筆御本謹寫之矣。一交子。

宗書于時應安元年後六月十八日，申出，東大寺本院法親王御自筆御本謹寫之矣。一交子。

宗書于時應安元年後六月十八日，申出，東大寺本院法親王御自筆御本謹寫之矣。一交子。

宗書于時應安元年後六月十八日，申出，東大寺本院法親王御自筆御本謹寫之矣。一交子。

宗書于時應安元年後六月十八日，申出，東大寺本院法親王御自筆御本謹寫之矣。一交子。

三摩耶戒私記教誨一冊三四八頁九頁

因別抄第三一冊三四八頁九頁

三摩耶戒私記教誨一冊三四八頁九頁

金剛仏子信瑜

金剛仏子信瑜

金剛仏子信瑜

金剛仏子信瑜

金剛仏子信瑜

金剛仏子信瑜
元亨三年卯六日以金剛輪院御本書写之了。件本教誨僧都所記之本也云々。

戒令元年八月廿三日写り。

校了之。

東南院本

応安二年九月十一日、於東大寺法相院、申申出門主、太主御筆之末謹奉校了之。

① 廷御修法注、一帖三五一五頁
② 廷安四年十二月廿四日申、賜門主太主相承御本三謹呪文記。
③ 代々御祝修法御祝経等記、一帖三五一五頁
④ 廷自大治五年至隆元年、前門主安養院御勅注三宝通通集下、「出門主具三王御勅出也。申出、両出御筆、応安

五年、五月十二月廿一日於燈下謹奉寫訳、信瑜記之。

後七日法記作訳七年、一帖三五一五頁

応安五年、十二月廿四日、為後記以定帳法印所持本写り之。

⑤ 藤草子口伝抄末、一帖三九九四三一頁

⑥ 報徳五年正月十四日、於三醍醐寺西光院抄之了。略

金剛仏子定超

金剛資信瑜

金剛資信瑜

信瑜

金剛仏子教誨

権大僧都厳仏

信瑜

略

略
信管

東大寺東南院経蔵十二巻本『僧伽補任』の性質について

永和三年正月十四日、於・真福寺宝生院。申下、門主一品大王御筆写本を他手へ抄本。

秘密法　一帖△四〇九頁△

正中元年十二月十二日抄写。

永和三年正月十六日、申出門主一品大王御筆写本を他手へ抄本。

定耀

嘉暦元年正月十五日写畢。一交畢。

信管

右に①から②として掲げたのは、書写年代順であり、①として掲げた『諸課西南院』一帖が、東大寺東南院主聖珍の信管の書写にかかる典籍には、右の貞治五年正月十八日、延文五年正月十八日、延文五年正月十八日、中川士輪院において書写校合した『金剛王院流聖経』五帖△九模観四〇一〇一頁△のものである。信管の書写にかかるものは、信管の書写にかかるものである。信管の書写にかかるものは、信管の書写にかかるものである。
聖珍所持本を書写したものではない。

(2)として掲げた永和三年（三七）正月十八日の書写奥書を有する『蔵経』第十二帖が、東大寺東南院主聖珍所持本を許可を受けて信経が書写した最後である。年にこれ以降の信経の著書にかかる典籍は、管見には入らず、弘和二年（三八）、八月七日に入院を迎えるまでの四箇年余りの間に、信経の典籍叢集・書写活動はなかったのかもしれ

また、(10)として掲げた『薄草子口伝抄』には、永和三年（三七）正月十四日の、真福寺宝生院において、信経が他者に書写を持ち、それを自ら校合したことが奥書にみえており、(6)の『三摩耶仏記銘経』を東大寺東南院において書写した応安二年（三九）、九月十一日以降、信経の東大寺東南院主聖珍所持本を書写したのは、貞治五年（三三）正月二十九日より、永和三年（三七）正月十四日までの間であることが判明し

ところで、この期間中に書写され、東大寺東南院に伝来した典籍の奥書に於て、『真福寺本願寺院内に帰っている典籍の奥書より推定できる限りでは、東大寺東南院に伝来した際、真福寺宝生院には伝来してあり、次にこの点について考えてみよう。

信経の東大寺東南院主聖珍所持本は、建久九年正月二十三日に、於て坦然寺本院、以来和寺大門房律師本を見た。伝写後、弘法大師伝を一冊あり、金剛
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧師補任』の性質について

（花押）

次の東大寺東南院伝来本『弘法大師伝』は、建久九年（一二五八）二月、興福寺遍智院において、成賢が仁和寺大円房律師の手を書写したものである。応安八年（一二七七）正月二十六日、興福寺阿弥陀院において転写し、同年三月二日に校合を終了したのである。

この『弘法大師伝』と同様のことが、険路書として知られている『瑠玉集』巻第十二・第十四及び唐の太宗文皇帝（李世民）とその側近の臣下らの漢詩集『翰林學士詩集』一巻によってももうかうことが出来る。前者『瑠玉集』は、

さらに『真福寺善本目録続編』（昭和十一年五月）を見てみると（花押内は同目録の頁数を示す。）。
兼東大寺住僧三輪宗實勝

無相宗字侶

三論疏講書

2) 中論疏講書

一冊

書

無相宗字侶

三論疏講書

3) 詠摩會精義二明用意抄

一冊

4) 勝鬘寶窟光斷鈔第一

5) 慶雲義疏記

一冊

5) 慶雲義疏記

一冊

正和三年九月二日、為九月一日東南院因明講用意書始之。仍同三日終功了。
東大寺東南院経蔵十二巻本『僧綱補任』の性質について

三論宗彰朝

同十一日校了。同汎在年四月之比令之書了。

同和四年十一月廿七日、於東大寺前方坊室相院、中出、東南院御本令之書了。

日書曰、僧義仏記、上巻に至る諸本は、(1)は東大寺の僧侶が光明山において書写したものである。これら(2)から(5)は、いずれも東大寺内において書写したものである。

臓測に過ぎないが、これら(1)から(5)として例示した典籍も、「弘法大師伝」、「明集」、「続林学士詩集」の東大寺東南院伝来本に同様、信淵の入覧は、すなわち弘和二年（永徳二年、一三八一）八月七日以降の書写者を有する東大寺東南院伝来本は管見に入らず。信淵が東大寺東南院伝来の諸本を収集書写し、それを信淵の東南院文庫に収蔵したと推定する時代に真福寺宝生院に入れたものと推測することが出来る。それゆえ、原本である可能性は十分に認められよう。信淵の時代に東大寺東南院経蔵本「僧綱補任」第一巻、第二巻が、真福寺宝生院に入っている。信淵の九月十四日に入覧した深賢によって、抄出された「僧綱補任」第二巻は完成して、醒醐寺光台院に収蔵されている。
以上のことより、恵珍撰『東大寺東南院経蔵本僧綱補任』との関係を考え、その編纂時期等について考察した結果、東大寺東南院経蔵本は興福寺本を基礎としたながらも、興福寺本が疑問を抱いている箇所については、他本を調査し、これに応えようと努めていた姿勢を見出すことが出来、その他本に誤りがあることもあろうものので、その編纂姿勢は、他本と比較して明らかになった。その編纂時期については、従来の学説が異なり、第一巻・第二巻の編纂は、三条天皇即位の年である承和二年（八九五年）十月に終了したもので、その最終巻である第十二巻は、六条天皇が謹位され新院（六条院）となられた承和三年（八九六年）に完成をみたことを推定した。

さらに、東大寺東南院経蔵本僧綱補任第一巻・第二巻は、真福寺第二世信僧（承和二年一三八八八月七月入寂）の時代に、『弘法大師伝』『毘沙門奉行集』『経集』『経林学士詩集』などの東大寺東南院伝来本ともともに、真福寺宝生院の文庫に入ったものと推測出来るということなどを述べた。

註

愛知県名古屋市中区大須にある北野山真福寺宝生院は、一般には「大須観音」の名称で親しまれる。関山能信上人（正応四

104
東大寺東南院絵巻十二巻本『僧綱補任』の性質について

昭和二十七年三月三日、京都府教育委員会に、僧綱補任の性質についての調査報告書が提出されました。調査は、東大寺東南院絵巻十二巻本『僧綱補任』の性質について行われ、その結果は以下の通りです。

1. 僧綱補任の性質
僧綱補任は、東大寺東南院絵巻十二巻本の重要文化財に指定されている。調査の結果、僧綱補任の性質は以下の通りである。

2. 調査の方法
調査は、東大寺東南院絵巻十二巻本の現存版を用いて行われました。調査の方法は以下の通りである。

3. 調査の結果
調査の結果、僧綱補任の性質は以下の通りである。

4. 調査の意義
僧綱補任の性質についての調査は、東大寺東南院絵巻十二巻本の重要文化財としての位置を明確にし、その保護に貢献するものである。

以上、僧綱補任の性質についての調査の結果を報告しました。
良卿は義満の弟子であり（興福寺本 略稱補任）
天平九年正月条、（三國仏伝通縁起 漢中·法相宗条によれば）
義満の七位足房寺基敏、行基·義満·行達·隆尊·良弁·宣教の一人といわれ、義満の弟子には慈訓がいる（興福寺別当第二条）。

良弁も義満の弟子であるものの、（続日本紀）宝亀四年閏十一月中子（十四日）条に、
と記されていますにすぎず、（扶桑略記）には、その入寛ささえ記されてはいない。現在知られている諸書のうち最も古い伝を
掲げているのは、（東大寺要録）第十一·本願寺第一（筒井英俊氏校訂）（東大寺要録）八月条、昭和五十五年五月、（吉川弘文館）八月条参照。

なお小論で触れていない良弁の僧正就任時期について、筒井英俊氏は右の論文の中でこの時期を論説を検討した上、（天平宝
字八年（七六四）九月十一日から十月十三日まで）の推定されている。

慶俊は、（義満）ともに、王仁の後裔氏族出身の僧侶として知られ（井上光政氏「王仁の後裔氏族とその仏教」／史学便
読）第五十四編第九号掲載、昭和昭和十四年九月。のち同氏著『日本古代仏教の研究』八月条、慶俊の考案（続日本紀研究）第四巻第十二号掲載、昭和昭和二十五年九月。

慶俊は、（義満）ともに、王仁の後裔氏族出身の僧侶として知られ（井上光政氏「王仁の後裔氏族とその仏教」／史学便
読）第五十四編第九号掲載、昭和昭和十四年九月。のち同氏著『日本古代仏教の研究』八月条、慶俊の考案（続日本紀研究）第四巻第十二号掲載、昭和昭和二十五年九月。

慶俊は、（義満）ともに、王仁の後裔氏族出身の僧侶として知られ（井上光政氏「王仁の後裔氏族とその仏教」／史学便
読）第五十四編第九号掲載、昭和昭和十四年九月。のち同氏著『日本古代仏教の研究』八月条、慶俊の考案（続日本紀研究）第四巻第十二号掲載、昭和昭和二十五年九月。